

八林秀一君を偲ぶ（弔辞から）

藪内 俊和*

八林秀一君、いつものように「やっち」と呼ばせてもらうけど、「やっち」よ、君はもう逝ってしまうのかい。私達は、数年前東京都サッカー協会が新たに発足させたオーバー60のシニアのリーグ戦に参戦すべく、東大ア式蹴球部の昔の仲間が集まって結成した「御殿下シニアフットボールクラブ（GSFC）」と一緒に加わり、漸く四十数年前と同じように一緒にサッカーができるようになったばかりというのに。

一昨年2011年春に、サッカーのプレーができるまでに回復した君は復帰するや、四十数年前と変わらぬ持ち前の抜群の巧みな球扱い、スピードのあるドリブル、正確無比なパスで忽ち我がチームの中盤のゲームメイカーとして、大活躍していた。夏の酷暑のさなかにも一緒に戦い、試合後のビールを美味そうに飲み干していた君の姿が忘れられない。8月に開かれた、年に一度のア式蹴球部の同期会では、11人の同期生の皆で、元気になった君を囲んで、四十数年前の思い出話や、サッカー談義に花を咲かせたばかりだったのに。

私達東大ア式蹴球部昭和40（1965）年入学の同期生の中で、八林秀一君はいつも一番のエースだった。1年生の時から一軍に選ばれて、秋のリーグ戦にもただ一人の1年生で出場し、小柄ながらさっそうと俊足を飛ばして活躍している彼の姿に、先輩も後輩も皆、目を見張ったものだった。当時の東大ア式蹴球部は大学サッカー、もっと言えば日本のサッカーの草分けチームとしての長い伝統を持ちながらも、関東大学リーグ2部に降格して久しく、「何とか1部へ復帰を」を宿願としていた。関東大学リーグ2部では中・下位に甘んじる年が続いていたが、私達が4年生の時には、有望な1年生が多数入部して近年にない強力な戦力となってきた。

また、当時の日本リーグの強豪チームの東京本社勤務の選手たちが夕方、御殿下グラウンドに集まり自主練習をするようになり、私たちにも胸を貸してくれることもあり、当時の日本のトップレベルのサッカープレイヤーの技術など大いに学ばせてもらったものだった。夏の山中寮での合宿では、恒例の最終日の山中湖一周レースで八林君は1時間を大幅に切る好記録のトップでゴールし、短距離のスピードだけでなく長距離の持久走でも抜群の能力を発揮し皆を驚かせた。

この年、私達は久しぶりに春の国公立大会で優勝し、また恒例の京大定期戦に夏のアウエーで快勝したのを始め、好成績を収めていた。ところが夏から秋にかけて、御殿下グラウンドに近い医学部での抗争を発端とする東大闘争が激化の一途を辿り、御殿下グラウンド周辺もデモ等で騒然としてきた。ストライキや授業放棄等で授業のない部員も多く、部員一人一人がこの東大闘争にどう関わるか、悩みながらのサッカー部生活であった。そういう部の中であって八林君は、同級生や下級生の良き相談役として、またチームのまとめ役として、騒然とした雰囲気の中なかでもサッカー部の

* 東京大学運動会ア式蹴球部前総監督

戦力維持向上にリーダーシップを発揮していた。

八林君の活躍により、私達は秋の関東大学リーグ2部のリーグ戦で、前年苦杯をなめた日体大にも快勝するなど順調に戦い、終盤には、1部への入れ替え戦出場権を得る2位以内を目前とするところまで来ていた。ところが最終前節の大事な対東京農大戦で思わぬ大敗を喫してしまった。最終節では快勝したものの、この1敗のために2位日体大と同率ながら得失点差で3位に甘んじることとなり、1部との入れ替え戦に出場できないことを知らされた時、私達4年生は全員、最終節の戦いを終えた御殿下グラウンドで茫然と立ち尽くしていた。その中でも涙を堪え、3年生以下に次年度の雪辱と励ましの言葉をかけ続けていた八林君の姿が昨日の事の様に目に浮かぶ。

年が明け、安田講堂の攻防、入試中止など、御殿下グラウンドの周辺は相変わらず騒然としていた。私は遅れて6月末に卒業し、社会人として実業団チームの一員となったが、留年の途を選んだ八林君は「5年生」としてもう一年サッカーを続け、翌年5度目の関東大学リーグ戦に挑戦した。その結果、今度は2部で見事優勝を果たして宿願の入れ替え戦に出場し、一年前の悔しい思いを思い切り晴らした。彼の、粘り強い、ぶれない持続性に私達は感嘆を禁じ得なかった。

八林君はサッカーだけでなく、学業でも私達のリーダーであった。同期の文系の部員何人かで、授業のない期間、御殿下グラウンドでの練習後、御茶ノ水や本郷の喫茶店に集まり、彼が好きだったマンハイム論を聞いたり、また、資本論論議をしたりするなど、自主勉強会の主催者・リーダーでもあった。

八林君は、卒業後、専修大学に職を得て教壇に立つことになったが、それから専門のドイツ経済史の他に、サッカーのトレーニング理論や、サッカー発祥の地、英国のサッカー風土研究にも領域を広げ、学問の世界でも活躍した。専修大学では今度は選手ではなく、サッカー部の部長として専修大学の「大学サッカー日本一」にも多大の貢献をしたと聞いて、私達同期生には皆、八林君の活躍ぶりのニュースはとても自然に受け入れられた。これも大学4年生の時の、あのときの悔しい思いを晴らしたい、その思いを持ち続けていた私達共通の悔しさの為せる業だったに違いない。八林君の「生き様」から、私達は「人間はどんなに悔しい思いをしても、それを忘れずに、それをバネにして、努力し続ければ必ず報われる」という事を教えられたのである。

いつも私達同期のエースだった「やっち」、4年間汗と涙を共にした同期生の中で一番まじめで、いつも冷静で、一番誠実で、一番誰にも優しく、先輩に愛され後輩にも慕われる、本当に素晴らしい「やっち」だった。そんな君に一番先に逝かれてしまったけど、彼の地でまたボールを皆で一緒に蹴りたいね。待っていてくれよ。

「やっち」、君が最後まで愛し続けた君の後輩たち、東大ア式蹴球部の現役選手達は今また、関東リーグへの復帰を目標に必死の戦いを続けている。また、君が教鞭をとった専修大学の学生たちは、君の、全ての人、全ての物事に対して誠実な、稀有な人間性に触れて得たもの・学んだものを、きっと将来に生かしてくれるものと確信している。

「やっち」、八林秀一君、有り難う。

今は、唯、さようなら。

平成25年春